

## 近代日本の国家と戦争

社会科教育講座・川岡勉

この授業は、学校教育実践コース(社会科教育)と人間社会デザインコースの共通科目として開講するもので、主たる対象は3回生である。受講者は学校教育実践コースが19名、人間社会デザインコースが7名、合計26名であった。

授業は日本における近代の戦争と軍隊の歴史の変遷をたどり、その特質を理解させることを目的とし、(1)日本における近代国民国家の成立過程の特質を理解する、(2)戦争や軍隊のあり方を規定した近代日本の社会構造や民衆意識を把握する、(3)近代戦争の特質と戦争責任論について、自分の考えをまとめ論述する力を身につける、という到達目標を設定した。

授業の構成は、次のとおりである。

- 1 近代の戦争と軍隊
- 2 日本軍の創設と天皇制
- 3・4 日本近現代史を考える(1・2)
- 5・6 日清戦争(1・2)
- 7・8 日露戦争(1・2)
- 9・10 第一次世界大戦(1・2)
- 11・12 満州事変と日中戦争(1・2)
- 13・14 太平洋戦争(1・2)
- 15 戦後処理と戦争責任

授業の進め方として、最初の2回は授業のねらいを説明し、近代の戦争と軍隊及び日本の近現代史に関する基礎的な知識をもたせるために講義を行なった。

3回目以降は、加藤陽子『それでも、日本人は「戦争」を選んだ』(朝日出版社、2009年)をテキストとして用い、これに基づいた発表及び討議の時間と、各テーマに関する講義の時間を交互に織り混ぜた授業展開とした。受講生には、あらかじめテキストを読んでくることを課し、感想・意見・質問を書いた紙を授業後に提出することを求めて、発表を担当しない学生も事前の準備をして授業に臨むようにさせた。また、テキストの内容を深めるために、適宜、必要な資料を掲載したプリント類を配布した。

最後に、テキスト及び授業内容をふまえて、自らの考えをまとめたレポートを提出させ、授

業中の態度や発表などを加味して成績評価を行なった。

最後の授業時間に、授業改善のためのアンケートをとり、学生の反応を聴取した。どの項目も5段階評価で4.48~3.86の間におさまっており、その中で比較的评价が高かったのは、授業の良好な雰囲気が保たれていた(4.48)、発表や質問の機会が与えられていた(4.43)、受講したことは有意義であった(4.43)などの項目であった。授業の目的が授業の中で明確であったかを問う項目の評価は4.1であり、学習の目的は概ね明瞭であったと思われる。また、使用したテキストは今年度初めて採用したものであったが、内容は適切だと受け止める回答が多かった(4.0)。

学生にこの授業で良かった点、特に興味深かった点を書かせたところ、発表者がまとめてくれて理解しやすかった、他の人の意見が参考になった、戦争に対する見方や考え方が大きく変わった、などの記述があった。改善すべき点については、戦争をめぐるテーマで学生自身の意見を出し合う場面をもっと作ってもよかったという声が寄せられた。

授業で使用したテキストは、単に近代の戦争の歴史をたどるという内容ではなく、戦争をテーマに中高校生に向かって授業を行なった記録であったため、特に教員養成課程の学生にとっては興味深かったのではないかと。また、生徒たち自身を当時の日本人が置かれた立場に立たせ、普通よき日本人や国家指導者が、もう「戦争」しかないと思ったのはなぜかを考えさせるという設定も、戦争というテーマを主体的に学習させる上で魅力的であった。

また、全員にテキストを読んだ感想・意見・質問を書いた紙を授業後に提出させる方式を採ったことによって、発表者以外の学生にも一定の問題意識をもって授業に臨む姿勢を作らせることができたように思われる。次年度以降、さらに学生の学習意欲を高めるためにはどうすればよいか、工夫を重ねていきたい。